



**Data**

監督・脚本・編集: 上田慎一郎

出演: 濱津隆之/真魚/しゅはまはるみ/長屋和彰/秋山ゆずき/細井学/市原洋/山崎俊太郎/大沢真一郎/竹原芳子/浅森咲希奈/吉田美紀/合田純奈/山口友和/藤村拓矢/イワゴウサトシ/高橋恭子/生見司織

## 👁️👁️ みどころ

低予算でも、素人に近い俳優陣でも、アイデアさえよければ！そして、脚本さえ良ければ！

『この世界の片隅に』（16年）や『バーバリ 王の凱旋』（17年）のように、稀にロコミだけでジワジワと人気が広がり大ヒットに至る映画があるが、本作のそれはケタ外れ！300万円の製作費で超拡大ロードショー、そして連日の超満員現象にビックリ！

前半は37分間のワンシーン・ワンカットによるゾンビサバイバル映画、そして後半は“ドッキリカメラ”まがいの、あっと驚くネタばらし満載という2部構成は確かに面白い。『カメラを止めるな!』というタイトルとそのアイデアは大成功だが、私はそこに総出していく今ドキの日本人の姿に、少し違和感と恐ろしさも・・・。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■製作費300万円、有名人ゼロの映画が大ヒット！ ■□■

本作を絶賛している著名監督には、本広克行、犬童一心、深田晃司らがいるが、本作を監督・脚本・編集した上田慎一郎を知ってる人は、私を含めて少ないはずだ。1984年生まれの彼は、過去いくつかの短編映画はあるものの、本作が劇場用長編デビュー作だ。また、本作の製作費はわずか300万円らしいし、出演する俳優たちも松本逢花（秋山ゆずき）は“アイドル女優”、神谷和明（長屋和彰）は“イケメン俳優”とされているが、それは映画の上だけの設定で、ホントはオーディションで選ばれた全く無名の俳優だ。チラシによれば、そんな本作がロコミによって異例の大ヒット！シネ・リーブル梅田でも本作

は満席続きで、立ち見状態が続く異例の事態になっている。

近年、邦画では『この世界の片隅に』（16年）（『シネマ 39』41頁）、インド映画では『バーバリ 王の凱旋』（17年）（『シネマ 41』141頁）等の同様の例があるが、本作ほど低予算のインディーズ映画が短期間でヒットした例はないだろう。しかして、その理由は一体ナニ？

## ■□■劇中劇は面白い！本作はその典型！しかもそれが突出！■□■

潜水艦モノは面白い！密室物は面白い！私にはそんな“映画哲学”があるが、“劇中劇は面白い！”もその1つ。その典型例が、洋画では『恋におちたシェイクスピア』（98年）、邦画では『蒲田行進曲』（82年）だ。それはなぜかという、同時並行的に描かれる2つの物語を観客は混乱しつつも同時に楽しむことができるからだ。しかして、本作はその劇中劇の典型！しかも、それが突出！もっとも、それは前半のみで、後半では前半の37分間ワンシーン・ワンカットで描かれた、ノンストップ・ゾンビサバイバル映画の舞台ウラが明かされるという2部構成になっている。『恋におちたシェイクスピア』も『蒲田行進曲』も著名監督と著名俳優による超大型作だったから、そのワンシーン、ワンカットには膨大な製作費を要しているはず。しかし、本作は約300万円の製作費だから、前半37分間のワンシーン・ワンカットのゾンビサバイバル映画を完成させた舞台ウラはかなりいい加減・・・？そんな内幕を正直に観客に見せてもいいの？そう思わざるを得ない、あっと驚く舞台ウラの実態が登場するので、それに注目！

このように本作は“劇中劇は面白い”という私の映画哲学を実証する1本で、それをさらにハチャメチャに突出させたもの。「ドッキリカメラ」と似たような、そんな企画が成功するか否かは微妙なところだが、幸いにもそれがアホバカバラエティー全盛の今の日本にマッチしたらしい。たしかに、本作は私にも非常に面白かったが、監督の狙いどおり、急所急所で爆笑を巻き起こす満席の観客を見ていると、私には果たしてこれでいいの？という気持ちも少し生まれてきたが・・・。

## ■□■映画づくりとは？どこまでホンモノにこだわるの？■□■

私は1度だけ神戸大学の映画研究会の映画祭に招かれて映画を鑑賞し、批評をしたことがあるが、本作冒頭にみる、松本がゾンビ化した神谷に襲われるシーンはまさにそのレベル。これでは日暮隆之監督（濱津隆之）が満足せず、「ホンモノをくれよ！ホンモノを！」と怒鳴り、キレてしまうのもよくわかる。しかし、映画づくりにおいて、監督はどこまでホンモノにこだわるの・・・？

黒澤明監督の映画づくりにおけるこだわりはものすごいもので、『乱』（85年）の嵐のシーンでは、ホンモノの台風の風が吹き始めるまで出演者とスタッフを何日も待たせ続けたという逸話（武勇伝？）等がたくさん残っている。ワンシーン・ワンカットのゾンビサバ

イバル映画を監督している日暮監督も、黒澤明監督と同じような“映画づくりにおけるホンモノへのこだわり”を持ってロケハンを決め、俳優たちのオーディションを行ったわけだが、いつまでも“アイドル女優”の域を出ない松本の演技ではそんなホンモノの映画はとて、とて・・・。

とりあえず日暮監督の怒気を鎮めるべく、人妻女優、相田舞（高橋恭子）の代役として出演している日暮監督の妻、日暮晴美（しゅはまはるみ）の音頭で休憩を取り、撮影場所になっている芦山浄水場ポンプ機械室にまつわる“ある都市伝説”について晴美が語り始めると、アレレ？突如ゾンビ化したカメラマンや録音マンが室内に入り込み、助監督の腕が吹っ飛んでくると？さあ、ここから始まるワンシーン・ワンカットのゾンビサバイバル映画に注目！さて、それはホンモノの演技？それとも、ホントのホンモノ？

## ■プロデューサーの要望は？映画撮影の舞台ウラでは？■

綾戸智恵は女流のジャズピアニストながら、“大阪のおばちゃん”そのものの雰囲気でおしめのコマーシャルにも出演しているが、本作には彼女とソックリの雰囲気を持った？



『カメラを止めるな！』  
画・王雅（2018. 10）

“超適当プロデューサー”の笹原芳子（竹原芳子）と、その相棒で“適当プロデューサー”の古沢真一郎（大沢真一郎）が登場する。映画監督ながら、黒澤明監督のような豪邸ではなく、元女優の専業主婦、晴美と、監督志望の暴走娘、真央（真魚）と共にマンションの一室でしがらみ暮らしをしている日暮監督は、そんな超適当プロデューサーと適当プロデューサーから見込まれて（？）ワンシーン・ワンカットのゾンビサバイバル映画の監督を

依頼されたわけだ。それを聞いた日暮は、言下に「それはとてもムリ！」とはねつけたものの、ロクな仕事の注文がない中、背に腹はかえられず、結局・・・。

そんな映画製作にまつわるストーリーが昨今の邦画界の実態なら、映画製作の舞台ウラで撮影風景を見守る2人のプロデューサーの姿も昨今の邦画界の実態。そのキーワードはまさに「適当」、つまり「いい加減」ということだ。もっとも、本作がすごいのは、その適当＝いい加減ぶりを300万円という超安価な製作費の中でやむを得ず、とことん徹底させたこと。ワンカットとはまさに本作のタイトル通り「カメラを止めない」で撮ることだが、37分間もずっと回り続けているカメラの前で脚本や台本通りの演技ができない状況になった場合、俳優やそれに指示をするスタッフたちは一体どうするの？撮影現場には「アドリブ」という面白い武器があるが、それをうまく使いこなせるのは百戦錬磨のベテラン俳優だけ。いくらスタッフから「その場を○秒間つなげ！」と指示されても、松本や神谷のような新米俳優ではそれはとてもムリ。しかし、元女優の晴美なら、今習っているというケツタイな護身術の話題でうまくつなぐことも可能・・・？

そんなシーンを含めて、本作後半では、まさに映画撮影の舞台ウラ（のインチキぶり、いい加減ぶり）を、適当プロデューサーと共に心ゆくまでタップリと！

## ■映画はアイデア！映画は脚本！それを痛感！だが・・・■

東京駅の八重洲口のすぐ近くにある国立映画アーカイブでは、私が去る6月28日に見学した「旅する黒澤明展」が今も開催されている。それを見れば、黒澤明監督とその作品のすごさがよくわかる。また、去る7月19日に100歳で亡くなった橋本忍が担当した『白い巨塔』（66年）、『日本のいちばん長い日』（67年）、『砂の器』（74年）、『八甲田山』（77年）等々の映画を観れば、彼が書いた70本を超える脚本の素晴らしさがよくわかる。

しかして、本作のパンフレットは「完全ネタバレ仕様」として、「作品鑑賞後にお読み下さい」と書かれているが、それは一体なぜ？また、そのパンフレットに収録されている『カメラを止めるな！』決定稿は、「※撮影前の決定稿。完成した映画との違いも楽しんで下さい。」と書かれているが、それは一体なぜ？まさに本作については、鑑賞後にこの「完全ネタバレ仕様」のパンフレットを読み、かつ『カメラを止めるな！』決定稿の脚本を読み、完成した映画と脚本（完成稿）との違いをしっかりと確認したい。

なるほど、安い製作費で、しかも素人に近い俳優をオーディションで選んで映画を製作するにはこういうアイデアが！本作を観れば、映画はアイデア！映画は脚本！ということがよくわかる。しかし、それにしてもロコミだけでここまでバカ売れの大ヒットになるとは！私は本作の面白さは認めるものの、マスコミの応援とそれに乗った若者たちの大量動員の姿を見ていると、かつて太平洋戦争で「天皇陛下バンザイ！」と叫んだ日本人と同じ姿を見るようで少し恐ろしい気持ちも・・・。

2018（平成30）年8月30日記